様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2023
課題番号：１６Ｋ０２６７５

研究課題名（和文）実証的データに基づくユカギール語の通時的研究の開拓

研究課題名（英文）Developing diachronic research on Yukaghir based on empirical data

研究代表者
遠藤　史（Endo, Fubito）

和歌山大学・経済学部・教授

研究者番号：２０２０３６７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：帝政ロシア時代の民族学者ヨヘリソンによる19世紀末のユカギール語の資料に基づいて、当時のユカギール語の文法構造を分析した。その結果に基づいて、現代のコリマ・ユカギールに至る変化を実証的に明らかにし、変化の要因について考察した。歴史統語論の視点からは、引用構文の発達、および文法化の過程による迂言的過去の歴史的形成を論じた。また、歴史語用論の視点からは、伝聞法の用法の変化について検討するとともに、文法的焦点現象とその文体的効果について論じた。また節連鎖について、この一世紀余りの間での節連鎖の著しい発達を指摘するとともに、副動詞の形成と文法化による節連鎖の発達の可能性を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
帝政ロシア時代の民族学者ヨヘリソンが収集したユカギール語資料は、19世紀末の時点におけるユカギール語の一次資料として貴重な言語学的資料であるにもかかわらず、ユカギール語研究の中では注目されてこなかった。この記録に光をあて、言語学的な分析を加えることで、ユカギール語研究の領域を拡大させることが可能であることを示した。共時的記述と比較言語学的探求という2つの分野において進められてきたユカギール語研究には、実証的データに基づいてユカギール語内部の歴史的変化を研究するという通時的研究の領域が欠落していた。この新たな領域に向けて研究を進めることにより、ユカギール語研究の新たな可能性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The author analyzed the grammatical structure of the Yukaghir language in the past, based on materials on the Yukaghir language at the end of the 19th century by Waldemar Jochelson, an ethnologist from the period of imperial Russia. Based on the results, the author empirically clarified the changes that led to modern Kolyma Yukaghir and discussed the factors behind the changes. From the perspective of historical syntax, the development of the citation construction and the historical formation of the periphrastic past through the process of grammaticalization were discussed. Furthermore, from the perspective of historical pragmatics, the author examined changes in the usage of the evidential mood and discussed grammatical focus phenomena and their stylistic effects. Moreover, the author pointed out the remarkable development of clause chains over the past century and discussed the possibility of the development of clause chains through the formation of converbs and grammaticalization.

研究分野：言語学

キーワード：ユカギール語　通時的研究　歴史統語論　歴史語用論　コリマ・ユカギール語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

帝政ロシア時代の民族学者 Waldemar Jochelson（以下ヨヘリソンと記す）は、1895-97 年と 1900-02 年の二回、東シベリアのコリマ川流域で現地調査を行い、ユカギール人に関する民族学的資料を多数収集した。その中で言語学的に注目すべき成果として、Jochelson(1900)を中心とした当時のユカギール語の充実した記録がある。民話や語彙を中心とするこれらの記録は、今から一世紀を遡る 19 世紀末の時点におけるユカギール語を記録した一次資料として貴重な言語学的資料であるにもかかわらず、ユカギール語研究の中ではほとんど注目されてこなかった。この記録に光をあて、言語学的な分析を加えることができれば、従来のユカギール語研究の領域を拡大させることが期待できよう。

ヨヘリソンの遺した記録は、質量ともに充実している。申請者が把握しているだけでも、そこには長文の民話テキスト約 100 篇、なぞなぞや民謡を含む短文テキスト約 20 篇、ごく簡単な文法概要、語彙リスト等が含まれる。これらのほとんどは現在のコリマ・ユカギール語が話される地域で収集されたものであるから、方言としての同一性も高い。しかもこれらは、ユカギール人がまだ伝統的な生活を送っていた時期に採集されたものであり、現代の現地調査によっては得られない、より古い段階における文法構造や語彙を保持しており、ユカギール語研究にとって重要な資料である。

共時的記述と比較言語学的探求という 2 つの分野において現在まで進められてきたユカギール語研究には、一つの大きな欠落がある。実証的データに基づいて、ユカギール語内部の歴史的変化を研究するという、通時的研究の領域（たとえば英語学では「英語史」にあたる領域）がそれである。ヨヘリソンの遺した記録を基にした、この新たな領域の開拓が求められている。

２．研究の目的

本研究の研究代表者は、1995 年の現地調査開始以来、コリマ・ユカギール語（東シベリアで約 30 人の話者によって話される古アジア諸語の 1 つで、言語系統的には孤立）の記述を継続的な研究課題とし、15 年以上の期間にわたって取り組んできた。本研究はこの研究課題のさらなる発展に向け、実証的データに基づいたユカギール語の通時的研究という新たな領域の開拓を目的とする。具体的には、上の「研究開始当初の背景」で言及した、帝政ロシア時代の民族学者ヨヘリソンによる 19 世紀末のユカギール語の記録を電子コーパス化し、それに基づいて当時のユカギール語の文法構造を共時的に分析した上で、現代のユカギール語と比較し、通時的変化とその要因を究明する。

本研究は、共時的記述と比較言語学的探求という 2 つの分野において現在まで進められてきたユカギール語研究における大きな欠落―実証的データに基づいて、ユカギール語内部の歴史的変化を研究するという通時的研究の領域―を埋め、将来の研究の発展の基礎を築くことを目論む。ヨヘリソンの遺した記録は、質と量の両面における充実ぶりから判断して、この新たな領域の開拓に最も適した資料である。

本研究が具体的に目標とするのは次の５点である：

（１）ヨヘリソンの遺した 19 世紀末のユカギール語の記録を電子コーパス化する。これによって、コンピュータでの正確で網羅的な処理を可能にする。

（２）この電子コーパスに基づき、当時のユカギール語の文法記述を行う。また、語彙を可能な限り収集する。

（３）これらを現代のユカギール語（特に直接の子孫と考えられるコリマ・ユカギール語）と比較して、19 世紀末から現代までのユカギール語の変化を明らかにする。

（4）それらの変化の要因を探る。文法変化については、その変化がユカギール語内部の構造的要因によるものか、それとも何かの外的要因（他言語との接触等による影響）に帰せられるものかを究明する。語彙変化については、他の北方諸言語研究者の力も借りつつ、言語接触の可能性に留意しつつ考察する。

（5）言語理論的な観点から、それらの変化のうち、テキスト資料を中心としつつ、特に語用論的現象の変化に注目する。歴史語用論(historical pragmatics)の研究を参考にしながら、歴史語用論的な観点から変化とその要因を考察する。

３．研究の方法

まず Jakobson et al.(1957)等の文献目録を出発点として、ヨヘリソンが遺した 19 世紀末のユカギール語の記録に関係する資料を可能な限り収集し、全貌を明らかにする。この作業は研究期間の 1 年目に集中して行う。少なくとも公刊されているヨヘリソンの主要なユカギール語の記録について、信頼すべき原文を入手する。

次いで、これに基づいてヨヘリソンによるユカギール語の記録の電子コーパス化を順次進め、コンピュータで可読なデータを蓄積する。

記録の電子コーパス化と並行して、テキスト集(Jochelson 1900)およびユカギール民族誌の中の民話を扱った章(Jochelson 1926)に収録されているユカギール語の原文に当たって、19 世紀末におけるユカギール語の文法構造を共時的な観点から分析する。この分析に際しては、ヨヘリソン自身が発表したユカギール語文法の概略の論文(Jochelson 1905)を考察の出発点とする。電子コーパスによって詳細な用例を追加することで批判的に検討し、修正作業を行っていく。

また、ヨヘリソンによる記録のより詳細な検討を行う。特にテキスト集(Jochelson 1900)のユカギール語資料には、従来報告されていない方言差異が含まれている可能性がある。これらを地理的方言・社会的方言（特に男女差）などに注目して可能な限り明らかにする。研究計画の後半となる最後の 2 年においては、これらの文法記述と語彙を、現代のユカギール語（特にコリマ・ユカギール語）のものと比較する。

後半の 2 年間では、既に前半でデータが蓄積されていることから、具体的データに基づいた歴史言語学的研究の視点から、この一世紀余りの間にユカギール語に起こった変化を実証的に明らかにするとともに、それらの変化の要因について考察する。文法変化に関しては内的・外的要因の究明に努める。語彙変化に関しては、東シベリアにおける言語接触に留意し、他の北方諸言語研究者とも意見交換の機会を持つ。また、語用論的現象の変化に関しては、近年発展している歴史語用論(historical pragmatics)の理論的動向に目配りしつつ、理論的観点から考察する。

４．研究成果

（1）ヨヘリソンが遺した 19 世紀末のユカギール語の記録に関係する資料を可能な限り収集した上で、そのユカギール語資料の重要な部分について電子コーパス化を進め、コンピュータで可読なデータを蓄積した。さらに、研究計画全体の基礎的作業として、19 世紀末におけるユカギール語の文法構造を共時的な観点から分析した。以上は Jochelson (1905)を出発点としつつ、順次用例を追加して批判的に検討し、修正作業を行った。

（2）以上の分析に基づいて、現代のユカギール語（特にコリマ・ユカギール語）のとの比較・対照を行った結果、歴史統語論の視点から、19 世紀末から現代までの一世紀余りの間にユカギール語に起こった変化の一端を実証的に明らかにするとともに、それらの変化の要因について考察を行った。

これらのうち、2017 年に出版された論文「コリマ・ユカギール語の引用構文とその発達」では、現代のコリマ・ユカギール語における、他者の発言を直接引用する構文（引用構文）がこの一世紀余りの間に大きく発達したことを指摘するとともに、19 世紀末に既に見られた萌芽的な表現の文法化という要因が関係する可能性を論じた。

また、2020 年に出版された Tasaku Tsunoda 編の論文集 *Mermaid Construction* に収められた論文"Kolyma Yukaghir"では、名詞 pen>前倚辞(enclitic)=ben の変化による文法化という過程によって、現代のコリマ・ユカギール語の記述に現れる迂言的過去の表現が形成された可能性を論じた。この成果は、日本語を含む他言語との類型論的共通性や地域特徴を示唆するものであり、国際的にも一定のインパクトがあった。

（3）以上の分析に基づいて、現代のユカギール語（特にコリマ・ユカギール語）のとの比較・対照を行った結果、歴史語用論の視点から、19 世紀末から現代までの一世紀余りの間にユカギール語に起こった変化の一端を実証的に明らかにするとともに、それらの変化の要因について考察を行った。

これらのうち、2018 年に出版された論文「コリマ・ユカギール語の動詞接尾辞-l'el の用法の歴史的変化について」では、現代のコリマ・ユカギール語の伝聞法の標識である-l'el が民話テキストの語りの中で発揮する用法を分析するとともに、19 世紀のテキストと比較・対照した場合、過去を表す用法の著しい発達が見られることを指摘した。また、2021 年に出版された論文「20 世紀初頭のコリマ・ユカギール民話の文体について」の中では、現代のコリマ・ユカギール語の文法を特徴づける文法的焦点の現象が 19 世紀末のテキストにも見られることを確認するとともに、その一部が話者による文体的差異を生み出している可能性を指摘した。

（4）現代のコリマ・ユカギール語の統語構造に特徴的である節連鎖(clause chaining)について、19 世紀末および（新たに入手した）それ以前の資料を検討し、比較・対照を行った。

まず、2021 年に出版された論文「20 世紀初頭のコリマ・ユカギール民話の文体について」では、現代のコリマ・ユカギール語においては節連鎖の著しい発達が見られ、一部は話者による文体的差異にまで発展していることを指摘した。次に、2024 年に出版予定の論文「コリマ・ユカギール語の節連鎖の発達についての試論」では、19 世紀半ば、19 世紀末、現代の 3 つの時期の資料を通時的に検討することにより、副動詞の形成と文法化の過程が、やがて節連鎖の大きな発達につながった可能性を指摘した。この 2 点の論文は本研究の研究代表者の問題意識を集約する位置づけを持つものであり、将来は著書の出版に繋げたい展望を持っている。

＜引用文献＞

Jakobson, Roman et al. (1957) *Paleosiberian peoples and languages: a bibliographical Guide* (HRAF Press, New Haven)

Jochelson, Waldemar (1900) *Materialy po izucheniju jukagirskovo jazyka i fol'klora* (Sankt-Peterburg)

-------- (1905) "Essay on the grammar of the Yukaghir language" *American Anthropologist* new series 7(2): 369-424.

-------- (1926) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus* (E.J. Brill, Leiden)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 遠藤　史	４．巻 417
２．論文標題 コリマ・ユカギール語の節連鎖の発達についての試論	５．発行年 2024年
３．雑誌名 経済理論	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 遠藤　史	４．巻 415
２．論文標題 コリマ・ユカギール語の長母音の音韻論的解釈をめぐって	５．発行年 2023年
３．雑誌名 経済理論	６．最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 遠藤　史	４．巻 26
２．論文標題 20世紀初頭のコリマ・ユカギール民話の文体について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 和歌山大学経済学会研究年報	６．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 遠藤　史	４．巻 393
２．論文標題 コリマ・ユカギール語の動詞接尾辞-l'elの用法の歴史的変化について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 経済理論	６．最初と最後の頁 17-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 遠藤　史	4．巻 10
2．論文標題 コリマ・ユカギール語の引用構文とその発達	5．発行年 2017年
3．雑誌名 北方人文研究	6．最初と最後の頁 129-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

1．著者名 Tsunoda, Tasaku (ed.), Fuyuki Ebata, Shiho Ebihara, Fubito Endo, Masumi Katagiri, Atsuhiko Kato, Kazuhiro Kawachi Joungmin Kim, Kazuyuki Kiryu, Megumi Kurebito, Asako Miyachi, Kan Sasaki, Michinori Shimoji, Satoko Shirai, et al.	4．発行年 2020年
2．出版社 De Gruyter Mouton: Berlin & Boston	5．総ページ数 868
3．書名 Mermaid construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance (Comparative Handbooks of Linguistics)	

1．著者名 A. N. Alekseev (ed.), Missonova, L.I., Zoriktuev B.R., Bravina R.I., Ivanova-Inarova Z.I., Petrova S.I., Zhukova L.I., Nemirovskij A.A., Fubito Endo, et al.	4．発行年 2017年
2．出版社 RIO Media-Xoldinga: Yakutsk	5．総ページ数 400
3．書名 Fol'klor paleoaziatskix narodov	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関